
Dr.HEMODY の使用経験

～当院用カスタマイズを取り入れて～

大山幸男、佐々木 亘、平野和生、吉岡 巧
宮形 滋*、木暮輝明*、原田 忠*
中通総合病院血液浄化療法部、同 泌尿器科*

Use experience of Dr.HEMODY. ～ Take in this customize for our Hospital ～

Yukio Oyama, Wataru Sasaki, Kazuo Hirano, Takumi Yoshioka
Shigeru Miyagata *, Teruaki Kigure *, Tadashi Harada *
Nakadoori general Hospital

<緒言>

当院では昨年6月より患者の診療情報、資材管理などを一元管理するために、グリーン情報システムズを開発元とした、旭メディカル発売元の透析診療総合管理システム Dr.HEMODY2000を導入した。

1年が経過し、大幅な業務改善がみられた。今後の有用性・使用方法について検討した。

<対象>

Dr.HEMODY2000のサーバー1台とモニタ3台、そして現任者のスタッフを対象とした。

<方法>

現任者スタッフに簡単なアンケートを実施した。

過去の毎日の記録物よりメリット・デメリットをピックアップした。

ソフトの開発・発売元のトラブルへの対応を検討した。

<結果>

スタッフに簡単な意識調査のアンケートをした結果、Dr.HEMODY導入後、6割以上のスタッフが業務改善に満足していたが、情報入力、文章入力に関しては5割が不満、画面レイアウト、操作性に関してはほぼ半数ずつという結果になった。

今回のアンケートより、パソコンを保有し、触れる機会が多かったスタッフは容易に親しむことができ、操作・入力に関しても慣れるのに時間を費やさなかった。

しかし、多くのスタッフが業務改善につながったと感じている半面、不満の原因として、操作性や入力画面の入口が複数あり、混乱を招いているという結果も生じた。

Dr.HEMODY 導入前よりも資材管理が容易になり、透析経過表作成に費やす時間が約40分も短縮され、履歴・記録も蓄積できるようになった。そのため、データを管理することで患者把握が容易になり、省スペース化にもつながった。また、医師も診療情報提供書が入力できるようになり、以前よりも簡易的に診療情報提供書を使用できるようになった。

Dr.HEMODY を導入してのトラブルをまとめた。

フリーズは1日に1回以上起こった。ワープロ機能は、フォント・サイズの変更不可、これにより入力スペースの字数が限定される、保存ができないなど不自由な点が見られた。

トラブル時、当初、担当者1人の連絡先しか聞かされていなかったため、担当者と連絡が取れないということが何度もあった。

その他、システム維持にかかる少々高いランニングコスト、コンピューター間のネットワークアクセス困難、入力操作の統一性のなさなどがあった。

<考察>

当院ではパソコンの保有率が8割を超え、普段より情報処理に関しては慣れ親しんでいた。今後は初心者にも使いやすいソフトになっていくものと期待している。

事務処理時間の軽減と患者の診療情報を一元管理できたことで、大幅な業務改善につながった。しかしながら、数々のトラブルの原因はオフィスソフトとの相互性によるものと考えられ、メーカーサイドと話し合い、近々対策を検討中である。

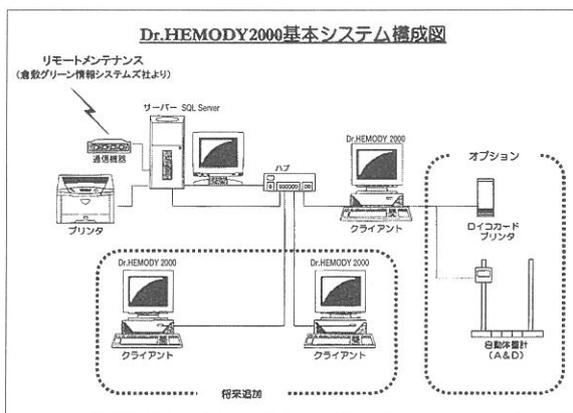


図1

Dr.HEMODY2000の基本システムです。当院ではサーバー1台、クライアント3台、プリンタでシステムを構成し使用している。

トラブル時は、グリーン情報システムズ社よりリモートメンテナンスにて対応してもらった。

図2

赤で囲んだ部分がカスタマイズを行ったものの一部である。

左の透析経過表は、以前文字を入力できなかったが、カスタム後は入力が可能になった。

右の診療情報提供書は、フォント、中央揃えなどを当院用にカスタマイズした。